

## 『蜻蛉集』全訳

吉川 順子\*

1885年出版のジュディット・ゴーチエによる『蜻蛉集』は、このフランス人女流作家と、当時西洋に赴いた数少ない日本人のひとりである西園寺公望という、日仏双方の高度な文化交流の担い手によって、歩み寄りと、心地よい隔たりを許し合いつつ、作り上げられたような和歌の翻訳集である。ここに、その西園寺による下訳とジュディットによる最終訳を、和訳を添えて掲載させていただけることになった。訳文を詳細にたどることで見えてくるそれぞれの思いは、19世紀末における両国人の立場や、詩や文化をめぐる志向、相手を知ることで新たに発見した方向性などの一片をなしている。ここでは全88首の収録歌につき、次の事項を掲載する。

〈歌番号〉本文には歌番号もページ数もないため、便宜的に前から順に付ける。

〈歌人名のローマ字転記〉誤りが多々みられるが、すべて本文のまま表記する。数首については詞書を含む。

〈ジュディットによる韻文訳〉本文通りに、5行詩のスタイルで掲載する。

〈韻文訳の和訳〉

〈西園寺公望による散文訳〉巻末に「蜻蛉の詩の逐語訳」として掲載されているもの。

〈散文訳の和訳〉

〈原歌、歌人名、出典、部立て、歌番号〉八代集歌は『新日本古典文学大系』、その他の歌は『国歌大観』に拠った。『小倉百人一首』に収められ

た歌はその番号も併せて表記する（18首）。

『蜻蛉集』には、歌人名以外で、原歌を示すものがいっさい挙げられていない。その原歌を、歌人名と、意識も少なくない本文をもとにしてほぼすべて明らかにしたのが、高橋邦太郎「『蜻蛉集』考」（『共立女子大学紀要』第12号、1966）である。そのなかで、高橋氏が特定したのは81首（19, 32, 43, 50, 68, 72, 84番が不詳）、そのうち2首（13, 33番、いずれも香川景樹）は原歌が判明しているながら、出典が記されなかった。この後、高階絵里加氏が『異界の海、芳翠・清輝・天心における西洋』（三好企画、2000）において、13番の出典、および72番の原歌を新たに明らかにされた。また、84番の原歌かと考えられる歌を、宇佐美斉『日仏交感の近代—文学・美術・音楽』（京都大学学術出版会、2006）に収録の論文で筆者が紹介した。

こうして現在は、5首（19, 32, 43, 50, 68番）の原歌と、1首（33番）の出典が未詳のまま残されている。以下、原歌のわからない5首について、若干の説明を加えておきたい。

19番の歌人名はIOLINとされているが、まずこれがどの人物を指すのか判然としない。「イオリン」か。あるいは「由良」をIoura、「西行」をSAIGIOとしていることから、「ヨリン」と読むのかもしれない。だが、伝達の際、筆記体のくせなどで読み違いがあったことも想像される。歌の内容から特定する方法もあるが、本歌取りによる類似の歌が多く、加えて本作品は意識性が濃いため容易ではない。この歌に関しても、「恋人が来ることを予言する蜘蛛」を主題とした、允恭紀の「我

\*京都大学大学院 文学研究科 博士後期課程

が夫子が来べき夕なりささがねの蜘蛛の行ひ是夕著しも」という衣通姫の歌に始まる一連の歌群に属すものと考えられる。土御門右大臣女、和泉式部、閑院大将、左近衛権中将藤原行輔などに訳の内容と似た歌があるが、「IOLIN」とどう結び付けられるか、未だ解決していない。

32番の作者はSANESKÉとある。これは、平安時代の歌人である藤原実資を指すと思われる。実資は日記『小右記』が有名であるが、和歌も『拾遺集』以下の勅撰集に8首入集されている。そのうち、『新千載和歌集』の2181番「みるからに袂ぞぬる桜花空よりほかの露やおくらん」は、「濡れた袖」、「涙」、「見る」などのキーワードが一致するが、意識というには内容に相違があるだろうか。

43番はTI-KANGUÉ、つまり『うけらが花』の作者、加藤千蔭のことだろう。歌の内容は、「花すゝき我こそ下に思しかほにいでゝ人にむすばれにけり」（藤原仲平朝臣、古今・恋五748）などと似ている。これを元にした歌が千蔭にあったのかもしれないが、今のところ不明である。

50番と68番については、いずれも「INCONNU 読人しらず」となっていることから、歌の特定はさらに困難である。50番は、「待ちえたるかひもなみだのふる雨に逢瀬へだつるあまの河波」（毛利元就、春霞集59）や、「もらさじと袖のなみだをつつむまに逢瀬によどむ中河の水」（続後拾遺・恋一653）などを思わせる。こうしたところから、歌群をたどって歌の特定に至るには、さらに調査を重ねていく必要がある。

その際、西園寺が手にしたと考えられる資料や、本作品全体に流れる色調を振り返ってみることも重要だろう。収められた歌の出典の傾向と内容の特色に関して、筆者が気付いたいくつかの点は、前掲書『日仏交感の近代』収録論文、および「ジュディット・ゴーチエ『蜻蛉集』における和歌翻訳について」、『人文知の新たな総合に向けて』第二回報告書Ⅳ〔文学篇1 論文〕（京都大学大学院

文学研究科21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」、2004）にまとめている。

また、山本芳翠による淡い挿絵は、本作品の大きな魅力のひとつだろう。画柄は全部で8種（蜻蛉、滝、松に蝙蝠、雪景の鳥、梅に鶯、笹、月に鳥、富士と芦雁）、それが色違いで11葉ずつあり、併せて88葉（＝収録歌数）となる。頁全体に及ぶ挿絵の上に、韻文訳が1首ずつ記載される。さらに7首（1, 15, 33, 49, 57, 63, 73番）には、歌の内容を表した単独刷りの画が添えられている。この挿絵を含む全編については、『ジュディット・ゴーチエー日本・中国趣味著作集一』、編集・解説小山ブリジット（エディション・シナプス、2007）に美しく復刻されている。

最後に、『蜻蛉集』全訳の掲載を叶えてくださった、お茶の水女子大学比較日本学研究センターの関係者、そして浅田徹先生には、心からの深謝を申し上げたい。

\*

本文に先立ち、友人に宛てた次の献辞がおかれている。ジュディット自身によって創作された5行詩として、最初に注目される。

A

MITSOU DA KOMIOSI

Je t'offre ces fleurs

De tes îles bien-aimées.

Sous nos ciels en pleurs,

Reconnais-tu leurs couleurs

Et leurs âmes parfumées ?

J. G.

あなたの愛する島国の これらの花を送ります。

涙にくれたこの空の下で、この色と香り立つ  
この心とに あなたは気付いてくれるでしょうか。

### 1. LA PRINCESSE ISSE

Pour cueillir la branche

Dont l'eau berce la couleur

Sur l'eau je me penche :

Hélas ! j'ai trempé ma manche

Et je n'ai pas pris de fleur !

水が静かに色を揺らす その枝を摘もうと 私は  
水面に身をかがめる。悲しいこと！私は袖を  
濡らして 花はつかめなかった！

Pour cueillir les fleurs de prunier, dont l'eau agite  
les couleurs, je me suis penchée vers l'eau, mais, hélas  
! je n'ai pas cueilli de fleurs et ma manche est toute  
trempée !

水が色を揺り動かしている、梅の花々を摘もう  
と、私は水面に身をかがめた、けれども、悲しい  
こと！私は花を摘まずに、袖がすっかり濡れてし  
まった！

春ごとにながるゝ河を花とみておられぬ水に袖  
やぬれなむ 伊勢（古今・春上43）

### 2. INCONNU

Sur l'eau de l'étang,

L'herbe à la plante enlacée,

Vert tapis, s'étend.

Aucun regard ne descend

Jusqu'au fond de ma pensée.

沼の水面に、絡みつく植物の草が、緑の絨  
毯を、広げている。誰の目も降りてはこない  
私の思いの底までは。

Sur l'étang s'étale le tapis des plantes aquatiques :  
personne ne soupçonne la profondeur de ma pensée.

沼の上に水生植物の絨毯が広がっている。誰も  
私の思いの深さに気付きはしない。

うき草のうへは繁れる淵なれやふかき心を知る  
人のなき 読人しらず（古今・恋一538）

### 3. MITSOU-NÉ

La nuit sans étoiles

Dérobe en ses sombres toiles

Les fleurs du pêcher.

Mais, parfum, quels sont les voiles

Où tu pourrais te cacher ?

星のない夜が その暗い布で 桃の花々を隠し  
ている。けれども、香りよ、おまえが隠れるこ  
とのできるヴェールはどれだい。

L'ombre terne de cette nuit de printemps dérobe la  
couleur des fleurs du prunier ; mais le parfum ne peut  
se cacher.

この春の夜の朧な陰が梅の花々の色を隠してい  
る。けれどもその香りは隠れられはしない。

春の夜の闇はあやなし梅花色こそ見えね香やは  
かくるゝ 凡河内躬恒（古今・春上41）

### 4. TOMONORI

Tout semble fleurir

Sous la neige qui voltige.

Comment découvrir,

Le prunier, dans ce prestige

Pour en cueillir une tige ?

すべてが花咲いているようだ 舞う雪の下で。  
どうやって見つけよう、梅の木を、このまぼ  
ろしのなかで 一本手折るために。

Quand il neige, tous les arbres fleurissent. Comment  
reconnaître le prunier pour en emporter une branche ?

雪が降ると、すべての木々が花を咲かせる。ど  
うやって梅の木を見分けて一枝もっていこうか。

雪ふれば木ごとに花ぞさきにけるいづれを梅と  
わきておらまし 紀友則（古今・冬337）

5. OKI-KASSÉ

Las d'un mal sans trêve,  
De ne jamais vous revoir  
J'ai fait mon devoir ;  
Mais le mensonge du rêve  
Me rend au cruel espoir.

あなたには決して再会できないという 止まぬ  
苦しみに疲れて、 私はなすべきことを尽くした。  
けれども夢のまぼろしが 私に残酷な希望をつ  
き返してくるのだ。

Dans mon désespoir je voudrais vous oublier ; mais  
la tromperie du rêve me rejette dans de vains espoirs.

悲嘆のなか私はあなたを忘れたい。けれども夢  
のいたずらが私をむなし希望のなかに再びおと  
しいれる。

わびぬればしひて忘れむと思へども夢といふ物  
ぞ人だのめなる 藤原興風（古今・恋二569）

6. TISATO

AU CONCOURS DE LA KISAKI 後の歌合で

En semant moi-même,  
Rêvant son cœur entr'ouvert,  
Cette fleur que j'aime,  
Avais-je oublié l'hiver  
Qui fane le chrysanthème ?

愛するこの花の、 種を自分でまいて、 ひら  
きかける花芯を夢見ていたとき、 私はその菊を  
枯らす 冬のことを忘れていたのか。

Quand j'ai semé cette plante, attendant la fleur avec  
impatience, est-ce que je songeais à l'hiver qui fane les  
chrysanthèmes ?

花を待ち遠しく思いながら、 この草木の種をま  
いたとき、 私はそれらの菊を枯らす冬のことを考  
えていただろうか。

うへし時花まちどをにありしきくうつろふ秋に  
あはむとや見し 大江千里（古今・秋下271）

7. SIGUÉ-YOUKI

Bien que je regrette  
Ses fleurs aux parfums flottants,  
Quittons la toilette  
Que je portais au printemps ;  
Car déjà l'été nous guette.

私は惜しい ゆらゆらと香り漂うその花々が、  
けれども手放そう 春に着ていた装いを。 も  
う夏が私たちを待ち構えているのだから。

Je regrette ma toilette du printemps toute embaumée  
de fleurs, et pourtant il me faut la quitter aujourd'hui  
car voici l'été.

私は花々の香りがいっぱい満ちた春の装いを  
惜んでいる、けれども今日はそれを手放さなく  
てはならない、なぜならもう夏なのだから。

花の色に染めし袂の惜しければ衣かへうき今日  
にもある哉 源重之（拾遺・夏81）

8. SÉ-KIO

Est-ce la gelée  
Blanche qui de pourpre a teint  
Toute la feuillée ?  
Frêle étoffe ! au vent lointain  
Sa pourpre s'est envolée.

木の葉をすっかり 緋色に染めたのは 白い露  
なのだろうか。 もろい布であることよ！ 遥かな  
風に その緋色は消えてしまった。

Est-ce la gelée blanche qui travaille à teindre  
comme une étoffe, les feuilles en pourpre ? En tout cas  
l'étoffe n'est pas solide car, à peine pourprée, le vent  
l'emporte.

白い霜が一生懸命、布のように葉を緋色に染め  
るのだろうか。 いずれにせよその布は丈夫ではな  
い、なぜなら緋色になった途端に、風が吹き飛ば  
してしまうから。

霜のたて露のぬきこそよはからし山の錦のをれ  
ばかつ散る 藤原関雄（古今・秋下291）

9. SADAÏÉ

O lune mourante,  
Qui vis mes pleurs douloureux  
Dans la nuit d'attente,  
Tu charmes l'amant heureux  
A l'aube quittant l'amante !

おお消えゆこうとする月よ、待ちぼうけの夜の私の苦しい涙をみたおまえは、夜明けに恋人のもとを後にする幸せな男をうっとりさせているのか！

Cette lune pâissante que je contemple encore après une longue nuit d'attente, est le spectacle matinal qui charme l'amant heureux revenant de chez son amante.

待ちぼうけの長い夜のあとに私がまだ眺めているこの青白く光る月は、恋人の家から帰る幸せな男をうっとりさせる朝の光景である。

帰るさの物とや人のながむらん待つ夜ながらのありあけの月 藤原定家（新古今・恋三1206）

10. TSOURA-YOUKI

Sur le mont Fouzi  
Je voyais la lune poindre ;  
Ce n'est plus ainsi :  
En mer elle vient me joindre,  
S'y lève et s'y couche aussi.

フジ山の上に 月があらわれるのを私は見ていた。でももうそうではない。月は私についてきて、海にのぼり、また海に沈む。

La lune, que je voyais dans la capitale, se lever au-dessus de la montagne, aujourd'hui je la vois sortir de la mer, et se coucher dans la mer.

都では、山の上に昇るのを見ていた月、私は今日それが海から出て、そして海に沈んでいくのを見ている。

宮こにて山の端に見し月なれど海より出でて海にこそ入れ 紀貫之（後撰・羈旅1355）

11. MONNÉ-SADA

Les brumes complices  
Cachent les fleurs du prunier.  
O vent printanier,  
Va dérober aux calices  
L'odeur qui fait mes délices.

霧がしめしあわせて 梅の花々を隠している。おお春の風よ、花のうてなから私をうっとりさせる香りをかすめ取りに行っておくれ。

Malgré le brouillard qui cache les fleurs du cerisier ; ô vent printanier, dérobe leur parfum et apporte-le moi.

霧が桜の花々を隠しているけれども。おお春の風よ、それらの香りをかすめ取り、私のもとへ運んできておくれ。

花の色は霞にこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風 良岑宗貞（古今・春下91）

12. TSOURA-YOUKI

Si du nouveau maître  
De mon logis bien-aimé  
Le cœur m'est fermé,  
Des fleurs je crois reconnaître  
L'ancien accueil embaumé.

たとえ私が愛した住みかの新しい主人の心は私に閉ざされていても、わかるだろうと思う花々のかつてのかぐわしいもてなしは。

Le cœur des nouveaux habitants de mon ancienne demeure, m'est peut-être hostile ; mais les fleurs, qui semblent se souvenir, m'envoient le même parfum qu'autrefois.

私の昔の住みかの新しい住人たちの心は、おそらく私に対して冷たいものだろう、けれども花々は、覚えているようで、かつてと同じ香りを私に送ってくれる。

ひとはいさ心もしらずふるさとは花ぞ昔の香にほひける 紀貫之（古今・春上42・百35）

13. KAGUÉ-KI

Mon amour s'éveille  
De son front, aube vermeille,  
Chassant ses cheveux ;  
Et l'oiseau fait, ô merveille !  
A l'Aurore ses aveux.

私の愛するひとが目を覚まし ぐれないの夜明け、額から 髪をはらう。そして鳥は、おおすばらしい！と あかつきに告げ言をする。

Quand ma bien-aimée écarte le désordre de ses cheveux de l'aurore de son front, près de sa fenêtre le rossignol chante l'aurore.

私の愛する女性が額にかかった夜明けの髪の乱れをはらうとき、窓のそばで鶯があかつきをほめ歌う。

わぎもこがねくたれ髪をあさなへとも来てなく鶯の声 香川景樹（桂園一枝・春22）

14. MOURASAKI

A CELUI QUI PART 旅立つひとへ  
Conte ton tourment  
Aux cigognes messagères  
Dont le vol charmant  
Semble, sur le firmament,  
Tracer des strophes légères !

あなたの苦しみを 使いの雁たちに話してください 彼らの美しい飛翔は、大空に、軽快な詩節を書いているようです！

Confiez vos messages à l'aile des cigognes, aux cigognes dont, sans relâche, le vol sur le ciel semble former des inscriptions.

あなたのことづてを雁の翼に託してください、たえまなく、空を飛ぶのが文字を形作るようにみえる、雁たちに。

北へゆく雁のつばさにことつてよ雲のうは書きかき絶えずして 紫式部（新古今・離別859）

15. NARI-HIRA\*

Je vous vis à peine  
Ainsi qu'on voit un éclair ;  
La flamme soudaine  
Qui pourtant brûla ma chair  
Va faire ma mort prochaine.

私はあなたをわずかに見たばかり 稲妻を見たかのように。にわかに炎が 私の体を焼き尽くし やがて死をもたらすだろう。

Je ne vous ai pas vue, pourtant vous m'avez ébloui ; et l'amour me brûle à tel point que je ne sais comment je pourrai vivre jusqu'à ce soir !

私はあなたを見なかった、けれどもあなたは私の目を眩ませた。そして恋が私を焼き尽くす、今宵までどうやって生きられるかわからないほどに！

見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日やながめ暮さむ 在原業平（古今・恋一476）

16. RÉPONSE DE L'INCONNUE 女性の返事

Qu'importe me voir ?  
Seule la pensée existe :  
Si, dans le miroir  
De votre esprit, je subsiste,  
Nous nous verrons quelque soir.

私を見ることなど重要でしょうか。思いだけが存在するものです。もし、あなたの精神の鏡のなかに、私が居続けるならば、私たちはいつの夜かお会いするでしょう。

Qu'importe que vous m'avez vue ou non ! la pensée seule existe et si je suis vraiment dans la vôtre nous nous reverrons bientôt.

あなたが私を見たか否かなど重要ではありません！思いだけが存在するものです、そしてもし私が本当にあなたの思いのなかにあるのなら私たちはすぐに再会するでしょう。

知る知らぬ何かあやなく分きて言はむ思ひのみこそしるべなりけれ 読人しらず（古今・恋一477）

17. INCONNU

En voyant la pluie,  
Sous les cerisiers en pleurs  
Je me suis enfuie,  
Pour que l'eau, qu'un souffle essuie,  
Me mouille à travers les fleurs.

雨を見て、涙にくれる桜の木々の下に 私は  
逃げ込んだ、そよ風の拭う、その雨水が 花々  
を通して私を濡らすように。

Tandis que je vais voir les fleurs de cerisier la pluie  
me surprend. Si je dois être mouillé que ce soit au  
moins sous les fleurs.

私が桜の花々を見に行こうとすると突然雨に降  
られた。もし濡れなければいけないのならそれは  
せめて花々の下でありますように。

桜狩雨は降りきぬおなじくは濡るとも花の影に  
隠れむ 読人しらず (拾遺・春50)

18. KIOS-KÉ

Pleurerai-je, un jour,  
Le mal du présent amour,  
Comme je les pleure,  
Tous ces maux qu'emporta l'heure  
Et que j'ai crus sans retour ?

いつか、私は涙を流すのだろうか、今の恋の  
不幸を思って、時が持ち去り 戻って来ること  
はないと信じていたすべての不幸を思って、今、  
涙を流しているように。

Regretterai-je un jour, la tristesse de l'heure  
présente, comme je regrette, dans le passé, des heures  
où je me croyais malheureux ?

私はいつか今の悲しみを懐かしむようになるの  
だろうか、過去に、自分は不幸だと思っていた時  
を、今は懐かしんでいるように。

ながらへば又このごろやしのばれん憂しと見し  
世ぞ今は恋しき

藤原清輔 (新古今・雑下1843・百84)

19. IOLIN

Trompeuse araignée  
Qui prédis, dans ce long soir,  
Que je vais la voir,  
Celle qui s'est éloignée,  
Je ne crois plus ton espoir.

嘘つき蜘蛛 この長い夜に、私が彼女に、  
遠ざかっていったあの女性に会えるだろうなどと  
予言して、私はもうおまえの期待など信じはし  
ないよ。

Araignée trompeuse qui multiplie tes mensonges,  
dans cette longue soirée, pour me prédire que je vais  
revoir l'absente ; je ne te crois plus !

嘘を重ねる嘘つき蜘蛛、この長い夕べ、私がこ  
こにいないひとに再び会えるなどと予言したりし  
て。私はもうおまえを信じないよ！ (原歌未詳)

20. LA FILLE DU POÈTE CHUNZÉ

詩人チュンゼの娘

La blanche fumée  
Qui roulait, puis s'envola,  
La nue enflammée  
Qui brillait et n'est plus là,  
Ah ! que c'est triste cela !

回転して、それから消え去っていった 白い煙、  
燃え立つ雲は 輝いていたのにもうそこにはな  
い、 ああ！なんて悲しいことでしょう！

La fumée qui va se dissoudre et disparaître sur terre,  
le nuage qui s'efface au ciel sans laisser de traces ;  
comme c'est triste !

地上で散り分かれてなくなっていく煙、空で跡  
形も残さずに消える雲、なんて悲しいのでしょ  
う！

薪つき煙も空に消えて後いづくにいける火の残  
るらん 藤原俊成女 (俊成卿女集181)

21. INCONNU

L'objet, cher jadis  
A mon souvenir fidèle,  
Que je le maudis !  
Car il me parle encor d'elle  
Et des bonheurs interdits.

かつては大切だった、思い出をうらぎらな  
かった物、それがいまはなんと忌まわしいこと  
か！ いまだ彼女のことを そして禁じられた幸  
せの数々を私に話しかけてくるのだから。

Cet objet qui me fut si précieux est maintenant mon  
ennemi puisqu'il me fait souvenir de ce que je veux  
oublier.

私にとってあれほど大切だったこの品が、今は  
私の敵です、忘れたいことを思い出させるのだから。

かたみこそ今はあだなれこれなくは忘るゝ時も  
あらし物を 読人しらず (古今・恋四746)

22. SIGUÉ-YOUIKI

Lorsque le vent brame,  
Au pied des rochers, la lame  
S'en va s'écraser :  
Tel, aux froideurs de votre âme.  
Mon amour vient se briser.

岩のもとで、風がうめき声をあげるとき、  
高波が砕け散っていく。こんなふうに、あなた  
のつれない心のもとへ 私の恋は砕けに来たので  
す。

Sans relâche les vagues, poussées par la tempête, se  
brisent contre les rochers. Sans fin mon amour se brise  
contre votre froideur.

たえまなく波が、嵐に押され、岩に当たって砕  
ける。とめどなく私の恋があなたの冷たさに当  
たって砕ける。

風をいたみ岩うつ波のをのれのみくだけてもの  
をおもふころかな

源重之 (詞花・恋上211・百48)

23. KOMATI

Je vois et j'entends,  
Sur le bleu chemin du rêve,  
Celui que j'attends.  
Dans la vie, en vain, longtemps  
Mes yeux l'ont cherché sans trêve !

私は会って話を聞いています、夢の青い道で、  
私が待っているひとと。うつつでは、むなし  
く、長い間 私の目はたえず彼を探していました  
のに！

Sur le chemin du rêve je rencontre souvent celui que  
j'aime et je m'arrête pour l'écouter ; mais hélas ! dans  
la vie réelle je ne l'ai jamais rencontré.

夢のなかの道で私は好きなのによく出会い、  
立ち止まって話を聞く、けれども悲しいこと！現  
実で私は決して彼に会えないでいる。

ゆめぢには足もやすめず通へども現にひとめ見  
しごとはあらず 小野小町 (古今・恋三658)

24. KANÉ-MASSA

*Les courlis du rempart de Souma*

スマの城壁の鳴たち

Le cri monotone  
Du courlis, qui vient et fuit,  
Hiver et automne  
T'éveille en la triste nuit,  
Gardien du rempart détruit.

来ては去っていく、鳴たちの 単調な鳴き声が  
冬に秋に 寂しい夜におまえを目覚めさせる、  
廃れた城壁の守衛よ。

Par le cri nocturne des courlis qui vont et reviennent  
de l'île Avadsi combien de fois a-t-il été réveillé le  
gardien du vieux rempart de Souma ?

アヴァジ島に行きつ戻りつする鳴たちの夜の鳴  
き声に、スマの古い城壁の守衛は幾度目を覚まし  
たことか。

淡路島かよふちどりのなくこゑにいく夜ねざめ  
ぬ須磨の関守 源兼昌 (金葉・冬270・百78)

25. LA MÈRE DU MINISTRE TOMONO-KODI

トモノコディ大臣の母

Toujours renaissants,  
Dans l'air le rossignol sème  
Les mêmes accents ;  
Mais moi combien je le sens  
Que je ne suis plus la même

鶯は永遠によみがえりつづける、 変わらぬ調べを 空にふりまいている。 けれども私はどれほど もう同じではないと感ずることでしょう。

Le chant du rossignol est toujours celui d'autrefois ;  
mais moi je ne suis plus la même ?

鶯の歌は相変わらず昔の歌だ。けれども私、私はもう同じではないのかしら。

鶯の鳴くなる声は昔にて我が身ひとつのあらずもある哉 藤原顕忠母（後撰・春下81）

26. INCONNU

Ah ! que je voudrais  
Cacher le ciel sous ma manche !  
Car j'empêcherais  
Le vent cruel, qui la penche,  
D'effeuiller la pauvre branche.

ああ！ 私の袖の下に空を隠せるといいのに！  
そうすれば 残酷な風が、かわいそうな枝をたわめ、 葉を落としてしまうのをとめるのに。

Ah ! si ma manche pouvait les cacher ciel je ne laisserais certes pas le vent tourmenter ainsi ces fleurs écloses.

ああ！ もし私の袖を空に覆い被せられるなら私はきつと風にこれらの咲いた花々をこんなに揺さぶらせはしないだろう。

大空におほふ許の袖も哉春咲く花を風にまかせじ 読人しらず（後撰・春中64）

27. LA PRINCESSE SIKISI

Douces fleurs qu'effleure

Le toit de notre demeure,  
Quand s'enfuira l'heure  
Où je vous vois dans mes pleurs,  
Ne m'oubliez pas, ô fleurs !

私たちの住まいの屋根にふれている やさしい花々よ、 私が涙のなかにおまえたちを見ている この時が過ぎても、私を忘れないでくれ、おお花々よ！

Quand le jour où je contemple les fleurs sera le passé, ô fleurs de prunier, épanouies à l'angle du toit, ne m'oubliez pas !

花々を眺めているこの日が過去のことになっても、おお、屋根の角に咲いた梅の花々よ、私を忘れないでくれ！

ながめつるけふは昔になりぬとも軒場の梅はわれをわするな 式子内親王（新古今・春上52）

28. HATSOU-TADA

Il n'est plus ce cœur  
Qui jadis, sans vous connaître,  
Triste croyait être !  
C'était sous votre œil moqueur  
Qu'aux douleurs il devait naître.

かつて、あなたと知りあえず、 悲しいと思い込んでいた心はもうない！ 苦しみを知りそめるべきなのは あなたのすげない目の下でした。

Quand je compare mon cœur d'aujourd'hui à celui dont je souffrais avant de vous connaître, je comprends qu'alors je ne connaissais pas la douleur.

私の今日の心をあなたを知る前に苦しんでいた心と比べたら、あの頃は苦しみというものを知らなかったのだとわかる。

逢ひ見ての後の心にくらぶれば昔は物も思はざりけり 権中納言敦忠（拾遺・恋二710・百43）

29. SAIGIO

Loin de tous, bien loin,  
Fuir parmi les rocs sans nombre !  
Et là, sans témoins,  
Dans la solitude sombre  
Conter mon amour à l'ombre !

誰からも遠く、ずっと遠く、あまたの岩のなかに逃げこもう！そしてそこで、人知れず、暗い孤独のなかで 闇に私の恋を打ち明けよう！

Tout seul, s'enfuir dans les rochers, loin, très loin, et penser à vous librement, effacé du regard des hommes !

たった一人、岩間に逃げて、遠く、ずっと遠く、人目から逃れて、自由にあなたのことを考えたい！

はるかなる岩のはざまに独りゐて人目おもはで物思はばや 西行法師（新古今・恋二1099）

30. LE BONZE LIOZEN

Lorsque j'abandonne  
Ma retraite monotone,  
Lassé d'être seul,  
Je ne vois qu'un soir d'automne  
Jetant partout son linceul.

ひとりきりに倦み疲れ、単調な侘び住まいを離れたけれど、秋の夜がそこかしこに帳をなげかけているのしか見えない。

Quand, fatigué de la triste retraite, je sors pour regarder la nature : partout la même soirée d'automne monotone et triste.

寂しい侘び住まいに疲れて、自然を見に外へ出たが。そこかしこ同じ単調で寂しい秋の夕べだった。

さびしさに宿を立ち出でてながむればいづくも同じ秋の夕暮

良暹法師（後拾遺・秋上333・百70）

31. INCONNU

Il n'est pas de lieu  
Que le printemps ne décore ;  
Car, sous le ciel bleu,  
Là, partout, encore, encore,  
Des fleurs, des fleurs, vont éclore !

春が彩らない 場所はない。なぜって、青い空の下、ほら、そこかしこ、もっと、もっと、花々が、花々が、咲こうとしている！

Il n'y a pas de lieu où le printemps n'existe : il est partout, partout ! Je ne vois que des fleurs s'épanouir, s'épanouir !

春が存在しない場所はない。それはそこかしこ、そこかしこに！私は花々が咲いて、咲いているのしか見えない！

春の色のいたりいたらぬ里はあらじさけるさかざる花の見ゆらん 読人しらず（古今・春下93）

32. SANESKÉ

Ma manche inondée  
De pleurs, qui l'a regardée ?  
Un indifférent !  
Par vous seul j'avais l'idée  
D'être vue ainsi pleurant.

涙があふれた私の袖を 誰が見たのか。関係のないひとですよ！私はあなただけに こうして涙にくれている袖を見てもらうつもりだったのに。

C'est un indifférent qui a remarqué ma manche trempée de larmes, tandis que je désirais qu'elle fût aperçue par vous seul.

涙に濡れた私の袖に気づいたのは関係のないひとだった、私はあなただけに見つけてもらいたかったのに。 藤原実資か（原歌未詳）

33. KAGUÉ-KI

L'oiseau chinois sème

Dans l'air chaque mot saisi :

Ah ! faites ainsi !

Quand je vous dis : « Je vous aime »

Dites : « Je vous aime » aussi.

中国の鳥は 言葉を聞くごと空にふりまく。  
ああ！そんなふうにしてください！ 私があなたに「愛している」と言ったら「愛している」と同じように言ってください。

Ainsi que l'oiseau chinois qui répète ce qu'il entend je voudrais, si je vous dis : « Amour » que vous répondiez « Amour ! »

聞いたことを繰り返す中国の鳥のように、私があなたに「愛」と言ったら、あなたは「愛」と答えてほしい！

こととへばこと問ひかへす唐鳥の恋しといへば  
恋しといはなん 香川景樹（出典未詳）

34. LA PRINCESSE ISSÉ

EN VOYANT UN PRUNIER EN FLEUR AU  
BORD DE L'EAU 水辺に花咲く梅の木を見て

L'eau claire, où se double

Cet arbre aux tendres couleurs,

Devient sombre et trouble

Quand les cruels vents siffleurs

Emportent parfums et fleurs.

この淡い色の木が映る 澄んだ水は、ひゅうひゅうと残酷な風たちが 香りと花々を運び去るとき 薄暗く曇る。

Cette eau claire qui depuis des années sert de miroir aux fleurs de pruniers se ternit quand les pétales s'envolent en tourbillon.

何年も前から梅の花々の鏡としてあるこの澄んだ水は、花びらが渦を巻いて舞い上がる時に曇る。

年をへて花のかゞみとなる水は散りかゝるをや曇るといふ覧 伊勢（古今・春上44）

35. MOURASAKI

Toi que j'aime tant

Pourquoi m'as-tu, m'évitant,

Caché ton visage ?

Ainsi, sortant d'un nuage,

La lune y rentre à l'instant.

私がこれほど愛しているあなた、どうして私を避けて 顔を隠したの。 そんなふうには、雲から出た月は すぐにそこへ戻ってしまう。

A peine suis-je parvenue à vous rencontrer, avant même que j'aie pu distinguer vos traits vous avez disparu, comme la lune qui un moment sort d'un nuage et s'y cache de nouveau.

やっと会えるや否や、表情さえ見分けられぬ前に、あなたは消えてしまった、まるで雲から一瞬出て再び隠れてしまう月のように。

めぐり逢ひて見しやそれともわかぬまに雲隠れにしよはの月かげ

紫式部（新古今・雑上1499・百57）

36. INCONNU

L'amour m'a rendu

Plus ombre que l'ombre même

Et, douleur suprême,

Ombre sans corps, éperdu,

J'erre loin de vous que j'aime !

恋は私を 影よりももっと影にした、そして、この上ない苦しみは、 狂った、体のない影、私は愛するあなたから遠くさまよう。

Par souffrance d'amour mon corps devient plus ombre que mon ombre, pourtant, pauvre ombre loin de son corps, je ne suis pas près de vous !

恋の苦しみで私の体は私の影よりももっと影のようになる、けれども、その体からは遠いかわいそうな影、私はあなたのそばにはいない！

こひすればわが身は影となりけりさりとて人に添はぬものゆへ 読人しらず（古今・恋一528）

37. MANSÉ

Est-ce au jour qui luit  
Qu'il faut comparer la vie ?  
A la nef qui fuit ?  
Au sillon qui l'a suivie ?  
A l'écume qui le suit ?

輝く日の光か 人生を例えるべきは。 去って  
いく舟か。 それにつづいた跡か。 その跡につ  
づく泡か。

A quoi peut-on comparer la vie ? au crépuscule ? au  
bateau qui passe ? au sillon que laisse le bateau ? ou à  
l'écume que laisse le sillon ?

人生を何に例えられるだろうか。 黄昏か。 過ぎ  
行く舟か。 舟が残す筋か。 あるいはその筋が残す  
泡にだろうか。

世中を何にたとへむ朝ぼらけ漕ぎ行く舟の跡の  
白波 沙弥満誓（拾遺・哀傷1327）

38. YOSI-TADA

Où le vent la lame  
Va le marin d'Ioura  
Qui n'a plus de rame :  
Ainsi, comme il le voudra,  
L'amour emporte mon âme !

波が望むところへ 舵のもうない ユラの水夫  
は行く。 こんなふうにも、 恋は私の心を 思う  
ようにさらっていく！

Comme le navigateur du port de Ioura qui a perdu  
son gouvernail, je ne sais pas où me conduit le chemin  
de l'amour.

ユラの港の舵を失った舟人のように、私はこの  
恋の道が私をどこへ導くのかわからない。

由良の門をわたる舟人かぢをたえゆくゑもしら  
ぬ恋の道かも

曾禰好忠（新古今・恋一1071・百46）

39. OKI-KASSÉ

La mort qui délivre,  
Si je ne peux vous revoir,  
Est mon seul espoir.  
Essayez votre pouvoir :  
Me faut-il mourir ou vivre ?

死が解放してくれる、 もしあなたに再び会え  
ないのなら、 それが私のただひとつの望みです。  
あなたの力をお試しください。 私は死ぬべき  
ですか生きるべきですか。

Je mourrai certainement de cet amour si je n'ai  
l'espérance de vous voir quelquefois. Ferez-vous  
l'essai ? et voudrez-vous me voir mourir ou vivre ?

私はきっとこの恋で死んでしまうでしょう、 い  
つかあなたに会えるという希望がもしなければ。  
試してみますか。 そしてあなたは私が死ぬか生き  
るか見てみたいですか。

かぎりなく深きおもひを忍ぶれば身をころすに  
もおとらざりけり

藤原興風（寛平御時后宮歌合・恋179）

40. LE MIKADO TENDI

Ma hutte qu'on voit  
Au milieu de la rizière,  
Des murs jusqu'au toit  
Est disjointe, et l'eau qui choisit  
Mouille ma manche grossière.

稲田の真ん中にみえる 私の仮小屋は、 壁か  
ら屋根まで 朽ちている、 だから落ちてくる水が  
私の粗末な袖を濡らす。

Ma hutte couverte en paille de riz, au milieu de  
la rizière, est disjointe et mes manches sont toutes  
mouillées de rosée.

稲田の真ん中にある、 米の藁で覆われた私の仮  
小屋は朽ちているので、 私の両袖がすっかり露で  
濡れている。

秋の田のかりほのいほの苦しき荒みわが衣手は露  
に濡れつゝ 天智天皇（後撰・秋中302・百1）

41. IYÉ-TAKA A LA CAMPAGNE 田園で

Sans route connue

Les amants vont sous la nue :

La nuit est venue....

Doux rossignol, garde-leur

Un abri sous quelque fleur !

道もわからず 恋人たちは空の下へ出た。夜がやってきた.... おとなしい鶯よ、彼らにどれか花の下の待避所をとってやっておくれ！

Tandis que les amants se promènent sans savoir où, la nuit tombe. Oh ! rossignol donne-leur un abri sous les fleurs !

恋人たちがどこかわからず散歩をしているうちに、夜になった。おお！鶯よ彼らに花々の下の待避所を与えてやっておくれ！

思ふどちそことも知らずゆきくれぬ花の宿かせ野への鶯 藤原家隆（新古今・春上82）

42. SODJO-HENDJO

Le lotus, charmant

Bien qu'il soit né dans la fange,

Comme un autre ment :

Sur ses feuilles, l'eau qu'il change

Nous semble perle ou diamant.

きれいな、睡蓮 泥のなかに生まれついたので、まるで別物のように嘘をついている。葉々の上で、変化させた水が 私たちには真珠かダイヤモンドのようにみえる。

Pourquoi le lotus, qui reste si pur tout en prenant racine dans la boue, nous trompe-t-il en montrant comme des pierreries la rosée égrenée sur ses feuilles ?

どうして睡蓮は、泥のなかに根を張りながらこんなに清いままでいて、葉々の上にぽつんぽつんと並んでいる露を宝石のように見せては私たちを欺くのでしょうか。

はちす葉のにごりに染まぬ心もてなにかはつゆを珠とあざむく 僧正遍昭（古今・夏165）

43. TI-KANGUÉ

Vous par qui je meurs,

Un autre homme vous possède !

Tel cet arbre en pleurs

De mon champs, sous le vent tiède,

Au clos voisin tend ses fleurs.

私はあなたのために死ぬというのに、そのあなたはほかの男のものだ！ こんなふうには涙を流すこの木は 私の畑にありながら、あたたかい風にふかれ、隣の圃に花々を伸ばす。

Celle que mon cœur aime par-dessus tout elle appartient à un autre ; ainsi ce saule, qui prend racine dans mon jardin, se penche poussé par le vent et embellit de ses rameaux l'enclos voisin !

私の心がなによりも愛する女性、彼女は他の男のものだ。こんなふうには、私の庭に根を張る柳は、風におされて傾き、その小枝で隣の圃を美しく飾っている！ 加藤千蔭か（原歌未詳）

44. HITO-MARO

Du cerf, anxieux

Devant la flèche cruelle

Du chasseur joyeux,

L'angoisse est peu près de celle

Qu'à mon cœur causent vos yeux.

楽しげな獵師の、残酷な矢の前の不安な、鹿の その苦悶はほとんど あなたの目が私の心に与える苦悶と同じなのです。

Même le cerf en face de la flèche de l'homme brutal n'éprouve pas une angoisse aussi poignante que celle qui, près de vous, me serre le cœur !

粗暴な男の矢の前の鹿でさえ、あなたの傍で、私の心を締めつける不安くらい胸を刺すような不安を感じはしない！

あち男の狩る矢の前に立鹿もいと我許物は思はじ 柿本人麿（拾遺・恋五954）

45. INCONNU

Est-ce seulement

Pour moi que le monde est triste ?

Est-ce qu'il existe,

L'insupportable tourment,

Depuis que l'homme subsiste ?

ただ 私にだけこの世は悲しいものなのか。  
たえがたい苦しみは、ひとが存在するようになつた時から あるものなのか。

Le monde était-il triste dans les temps anciens ? ou  
l'est-il devenu pour moi seul ?

いにしえの時代にも世の中は悲しいものだったのか。あるいは私にだけそうってしまったのか。

世中は昔よりやは憂かりけんわが身ひとつのためになれるか 読人しらず (古今・雑下948)

46. TSOURA-YOUKI

Quand il neige en l'air,

Dans la chambre on voit encore

Des fleurs au ton clair

Que l'hiver a fait éclore,

Et que le printemps ignore.

空に雪が降ると、部屋からまた 淡い色の花々が見える 冬が咲かせた、春の知らない花々。

Quand il neige les arbres et les plantes renfermées  
pour l'hiver, font éclore des fleurs qui ne sont pas  
connues du printemps.

雪が降ると冬のために閉じこめられていた木々や植物が、春の知らない花々を咲かせる。

雪ふれば冬ごもりせる草も木も春に知られぬ花ぞさきける 紀貫之 (古今・冬323)

47. INCONNU

O fleur du prunier

Qui vas t'enfuir, tout à l'heure,

Au vent qui t'effleure,

Qu'au moins ton parfum demeure

Comme un souvenir dernier !

おお梅の花 風にかすめられ、いましがた、消え去ってしまったけれど、せめておまえの香りはとどまっていたほしい 最後の思い出として！

Oh ! fleur du prunier si tu t'envoles laisse-moi au  
moins ton parfum comme souvenir.

おお！梅の花よ、消え去るのなら、せめて思い出におまえの香りを私に残していっておくれ。

散りぬとも香をだにのこせ梅の花こひしき時の思い出にせん 読人知らず (古今・春上48)

48. TÉSINÉ-KO

Ah ! si l'on révèle

Que le Mikado viendra

Au feuillage frêle

Du faite de l'Ogoura,

Pour tomber il attendra.

ああ！ミカドがやって来るよともしオグラの頂の はかない葉々に知らせたら、葉々は散るのを待つだろう。

Si les feuilles pourprées par l'automne sur la cime  
du mont Ogoura, pouvaient savoir, elles retarderaient  
leur chute jusqu'à la visite de l'empereur !

もしオグラ山の頂の秋によって緋色にされた葉々が知り得たら、帝が訪れるまで、散るのを遅らせるだろうに！

小倉山峰のもみぢ葉心あらば今一度の行幸待たなん

小一条太政大臣／貞信公 (拾遺・雑秋1128・百26)

49. LE BONZE NAGAIÉ

*Retiré du monde après la mort de sa bien-aimée.*

愛する女性の死後、世を離れて

Dans cette demeure

D'où, tous deux, nous aimions voir

La lune le soir,

Hélas ! de l'astre, à cette heure,

Le rayon seul rode et pleure !

私たち二人、夜に月を眺めるのが好きだった  
この住まいに 悲しいこと！今は、星の光だ  
けがさまよい涙を流している！

Dans cette demeure d'où nous avons ensemble  
contemplé la lune, la lune seule revient aujourd'hui.

私たちが一緒に月を眺めるのが好きだったこの  
住まいに、今は月だけがやってくる。

もろともにながめし人もわれもなき宿には月や  
ひとりすむらん 民部卿長家（後拾遺・雑一855）

50. INCONNU

RENDEZ-VOUS あいびき

L'eau tombe par flots !

Et ce malheur bouleverse

Nos tendres complots.

Moi je retiens mes sanglots

Pour ne pas grossir l'averse.

雨水がつぎつぎと降ってくる！そしてこの不  
幸が 私たちの愛のはかりごとを滅茶苦茶にして  
しまう。私はすすり泣きをこらえています に  
わか雨をさらにひどくさせないように。

La pluie qui tombe par torrents fait manquer le  
rendez-vous et je retiens mes larmes pour ne pas  
grossir l'averse.

滝のように降る雨のせいであなたとのあいびき  
がなくなってしまう、私はにわか雨をさらにひど  
くさせないよう涙をこらえている。

読人しらず（原歌未詳）

51. INCONNU

Rossignole, tu mêles

De ce saule printanier

Les écheveaux frères,

Pour coudre, sur le prunier,

Le chapeau des fleurs nouvelles.

鶯よ、おまえは この春の柳の 弱いもつれを  
縫って、梅の木の上に、新しい花々の帽子を  
縫っているんだね。

Le rossignol tord le fil des saules et ce qu'il coud  
c'est le chapeau des fleurs de prunier.

鶯が柳の糸をよじっている、彼が縫っているも  
の、それは梅の花々でできた帽子である。

青柳を片糸によりてうぐひすの縫ふてふ笠は梅  
のはながさ（古今・神遊びの歌1081）

52. KALIOU

Le Fouzi dans l'air

Monte haut ; pourtant la flamme

Du volcan qui clame

Plus haut lance un rouge éclair...

Mais jusqu'où s'élève l'âme ?

フジは天空に 高くそびえている、けれども  
ごうごうたる火山の炎は もっと高く赤い光をな  
げかけている.... だが心はどこまでのぼるだろ  
うか。

La plus haute montagne c'est le Fouzi, mais la  
fumée brûlante du cratère monte plus haut encore,  
et l'on se dit que rien ne peut s'élever au delà. —  
Cependant la pensée humaine où donc s'arrête-t-elle ?

いちばん高い山それはフジだ、けれども噴火口  
の熱い煙はさらにもっと高くのぼる、そしてそれ  
より上にのぼることのできるものは何もないと人  
はいう。—けれども人の思いはいったいどこで止  
まるだろうか。

富士のねの煙もなをぞ立ちのぼる上なきものは  
思ひなりけり 藤原家隆（新古今・恋二1132）

53. YOSSI-MOTO

Vouloir oublier  
C'est se souvenir encore !  
Comment délier  
Une chaîne que j'abhorre  
Quand toujours mon cœur l'adore ?

忘れたいと思う それはまだ思い出しているの  
です！ どうやってほどこう いまわしい鎖を  
私の心はあいかわらず熱望しているのに。

La volonté d'oublier c'est encore une façon de se  
souvenir. Comment pourrai-je obtenir de moi-même ce  
que mon cœur ne veut pas ?

忘れようとする意志、それはまだ思い出してい  
るということだ。私の心が望まないことを私はど  
うやって自分から得られるだろうか。

忘れなんと思ふさへこそ思ふことかなはぬ身には  
かなはざりけれ 大弍良基（後拾遺・恋三759）

54. SUTOK

EMPEREUR DÉTRONÉ 退位した天皇

Où donc s'en vont-elles,  
Ces feuilles, en se suivant  
Avec un bruit d'ailes ?  
C'est fini : le triste vent  
Seul de l'automne est vivant !

いったいどこへ行くのだろう、これらの葉々  
は、つらなりあい 羽音を立てて。終わった。  
悲しい風 それだけが秋の名残りだ！

Où vont les feuilles pourprées, arrachées des arbres  
? Elles volent, elles passent, et le bruit du vent est tout  
ce qui reste de l'automne !

木々から剥がれ落ちた、緋色の葉々はどこへ行  
くのだろう。それらは舞い、行き過ぎ、そして風  
の音が秋が残していくものすべてだ！

もみぢ葉のちりゆくかたをたづぬれば秋も嵐の  
声のみぞする 崇徳院（千載・秋下381）

55. TSOURA-YOUKI

Ah ! depuis longtemps,  
Si je n'avais pas de larmes,  
Les désirs constants  
De mon amour plein d'alarmes,  
Brûleraient mon cœur sans armes !

ああ！ずっと前から、もし私に涙がなかったら、  
不安にみちた私の恋の たえざる望みが、  
無防備な私の心を焼き尽くしてしまっていたら  
ろう！

Si je n'avais pas de larmes, l'ardeur de mon amour  
aurait depuis longtemps brûlé mon cœur.

もし私に涙がなかったら、私の恋の熱は私の心  
をずっと前から焼き尽くしてしまっていたらろう。

君こふる涙しなくは唐衣むねのあたりは色もえ  
なまし 紀貫之（古今・恋二572）

56. FOUKA-YABOU

LA NEIGE 雪

Puisque c'est du ciel,  
Qu'en hiver, nous sont venues  
Ces fleurs inconnues,  
C'est qu'un printemps éternel  
Réside au delà des nues.

空から、冬なのに、私たちのところへ これ  
らの見知らぬ花々がやってきたのだから、永遠  
の春が 雲の向こうにあるのだろう。

En hiver les fleurs tombent du ciel. Le printemps  
réside-t-il donc au delà des nuages ?

冬に空から花々が降ってくる。春はいったい雲  
の向こうにあるのだろうか。

冬ながら空より花の散りくるは雲のあなたは春  
にやあるらん 清原深養父（古今・冬330）

57. LE BONZE SOSSÉ

Ah ! je vois Kioto

Parmi ses fleurs sans rivales !

Sur tout le coteau,

Le saule, avec les pétales,

Au printemps tisse un manteau !

ああ！キョウトが 比類ない花々に囲まれているのが見える！ 丘じゅうに、柳が、花びらで、春のコートを織っているよ！

En voyant de loin de la capitale j'admire les saules et les cerisiers en fleurs qui mêlent leurs rameaux et semblent tisser l'étoffe du printemps.

都の遠くから眺めて、柳と花咲いた桜の木が枝をよりあわせ、春の布を織っているように見えるのに私は見とれている。

見わたせば柳さくらをこきまぜて宮こそ春の錦なりける 素性法師（古今・春上56）

58. DAINI

MATIN D'AUTOMNE 秋の朝

Pour fondre et mêler

Les perles de la rosée,

Le vent peut souffler !

Chaque goutte, aux fleurs posée,

Y reste seule irisée.

露の玉を 融かして混ぜるために 風は吹いているのだろう！ 花々の上に置いた、しずくはどれも ただ虹色に輝くままである。

En dépit du vent d'automne qui souffle pour réunir les grains dispersés de la rosée, sur aucune tige de roseau la rosée ne s'est rejointe.

秋の風が吹いて、散らばった露の粒を再びひとつにしようとするにもかかわらず、どの葦の茎の上でも露は再びまとまらなかった。

秋風はふきむすべどもしら露のみだれてをかぬ草の葉ぞなき 大式三位（新古今・秋上310）

59. LE RÉGENT GOKIO-GOKOU

Croit-on que souvent ゴキョウゴク撰政

L'on puisse écouter du vent

La plainte haletante,

Courir dans le bois mouvant,

Par un triste soir d'attente ?

ひとびとは よく耳にできるものと思っているのだろうか、風の息もたえだえなむせび泣きが待ちぼうけの寂しい夜に うごめく森のなかを駆け抜けていくのを。

Croit-on que c'est une chose qu'on puisse écouter tous les jours : le vent qui souffle dans les sapins un soir d'attente ?

毎日聞けるものと思っているのだろうか。ある待ちぼうけの夜に樅の木々の間で吹く風を。

いつも聞く物とや人の思らんこぬ夕暮の秋風のこと

後京極撰政／藤原良経（新古今・恋四1310）

60. NO-INE

EXIL 流浪

Quand j'ai fui Kioto,

Du printemps la douce haleine

Caressait la plaine ;

Mais, à la frontière à peine,

L'hiver souffle en mon manteau.

私がキョウトを去ったとき、春のやさしい息吹が 平野を撫でていた。けれども、国境に来るや否や、冬が私のコートに吹きつけている。

Quand j'ai quitté la capitale c'était le doux printemps et les nuages légers, en passant la frontière comme déjà je souffre du vent d'automne.

私が都を離れたのはあたたかい春と軽い雲のころだった、国境を通り過ぎながら、私はもうこんなに秋の風に吹かれている。

都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関 能因法師（後拾遺・羈旅518）

61. SONO-KA

TRISTESSE DE CONVALESCENT

快方に向かった病人の悲しみ

Moi j'étais captif

Au fond de la chambre close ;

Le printemps furtif,

Sourd à mon regret plaintif,

A fauché sa moisson rose !

私は閉ざされた部屋の奥に 囚われていた。  
知らぬまに春は、私のうめき声をあげる後悔に  
耳を貸さず、ばら色の実りを刈り取ってしまった！

Pendant que j'étais prisonnier ne sachant rien du  
printemps, voici que les fleurs de cerisiers ont vécu !

私が春のことは何も知らず、囚われの身であつた  
あいだに、ほらこんなに桜の花が息づいていた！

たれこめてはるのゆくゑも知らぬまにまちし桜  
もうつろひにけり 藤原因香（古今・春下80）

62. TADAMINÉ

Eventail qui charmes,

T'aimera-t-on tout l'été ?

Seras-tu jeté,

Avant que sur ta beauté

L'automne ait pleuré ses larmes ?

きれいな扇、皆は夏中おまえを愛するだろう  
か。秋が涙を 美しいおまえの上に落とす前  
におまえは捨てられてしまうだろうか。

L'éventail sera-t-il mis de côté avant que l'automne  
ait pleuré sa rosée ? ou la rosée paraîtra-t-elle avant  
que l'on soit rassasié de l'éventail ?

秋が露の涙を流してしまう前に扇は脇に置かれて  
しまうのだろうか。あるいは人々が扇に飽きる  
前に露が現れるのだろうか。

夏はつる扇と秋のしら露といづれかまづはをかん  
とすらん 壬生忠峯（新古今・夏283）

63. HIDÉ-YOSSI

Sur ma manche rose,

Dont mes larmes noient les fleurs,

La lune se pose.

Dis au moins : Pourquoi ces pleurs ?

O toi, qui sais bien leur cause !

涙が溢れて花が水浸しになった、私のばら色  
の袖に、月が宿る。せめて、その涙はどうした  
のかと問うてください。おおあなたは、その  
訳をよくご存知ではありませんか！

La lune se pose sur ma manche de soie trempée  
de larmes ; je voudrais qu'il me demandât pourquoi,  
comme s'il l'ignorait !

月が涙で濡れた私の絹の袖の上に宿っている。  
私は、あたかもわからないかのように、どうして  
かと彼に尋ねてほしい！

袖のうへにたれゆへ月は宿るぞとよそになして  
も人の問へかし 藤原秀能（新古今・恋二1139）

64. SAIGIO GUERRIER CÉLÈBRE DEVENU

BONZE 僧侶になった有名な武士

Même aux yeux railleurs

Pour qui rien n'a plus de charmes,

En brisant les fleurs,

Dans les jardins sans couleurs,

L'automne arrache des larmes.

何にも気をひかれず さげすむような目にも、  
色のない庭で 花々をなぎ倒していく 秋は涙を  
かきたてる。

Même à celui qui ne s'intéresse plus à rien, la  
tristesse de l'automne quand le vent secoue les fleurs  
de chrysanthèmes, ne peut être indifférente.

もう何にも関心をもたない人でさえ、風が菊の  
花々を揺さぶるときの秋の悲しさには無関心では  
いられない。

をしなべてものを思はぬ人にさへ心をつくる秋  
のはつ風 西行法師（新古今・秋上299）

65. KOMATI

Pendant que rêvant,  
Pleine de mélancolie,  
J'ai laissé souvent  
L'heure fuir avec le vent,  
La fleur est déjà pâlie !

憂いでいっぱいになり、ぼんやりとして、  
私がしじゅう 時が風と共に過ぎ行くままにして  
いたあいだ、花はもう色あせてしまった！

Pendant que je laissais passer le temps avec  
mélancolie, l'éclat des fleurs se flétrissait.

私が鬱々として時の過ぎ行くままにしていたあ  
いだ、花々の輝きはあせてしまっていた。

花の色はうつりにけりないたづらにわが身世に  
ふるながめせしまに

小野小町（古今・春下113・百9）

66. KEN-TOKOU-KO

*A une femme après deux jours de bouderie*

二日間の仲違いののちある女へ

La barrière, hélas !  
Depuis hier par nous dressée  
Entre nos cœurs las,  
Déjà semble à ma pensée  
Par des siècles amassée.

柵、悲しいこと！ 昨日から私たちが 疲れた  
ふたりの心のあいだに立てたけれど、もう私の  
心にとっては 幾世紀も過ぎたようだ。

La barrière qui s'est dressée entre nous depuis peu :  
aujourd'hui et hier ; il me semble qu'il y a mille ans  
qu'elle est là !

私たちの間に立ちはだかってほどへない柵。今  
日そして昨日。私にはそれがそこにあるようにな  
ってから千年も経ったように思われる！

別れては昨日けふこそへだてつれちよゝを経た  
る心ちのみする

謙徳公／藤原伊尹（新古今・恋四1237）

67. RÉPONSE ÉTI エチの返し

Sais-je, hélas ! moi-même  
Quel jour nous vint délier  
D'un serment suprême,  
Quand mon cœur put oublier  
Jusqu'à quel point il vous aime ?

私自身わかるでしょうか、悲しいこと！ 何日  
私たちが この上ない誓いから解かれていたかな  
んて、どれほどあなたを愛しているか 私の心  
が忘れてしまいそうなときに。

Comment saurai-je si c'était hier ou aujourd'hui  
quand mon cœur était à tel point éperdu qu'il a pu  
vous chasser de lui ?

それが昨日であったか今日であったか私にどう  
してわかるでしょう、私の心が、あなたをも追い  
やっしまいそうなほど取り乱しているときに。

昨日ともけふとも知らず今はとて別れしほどの  
心まどひに

恵子女王／謙徳公北方（新古今・恋四1238）

68. INCONNU

Je sombre, je meurs !  
O vent qui fais ma détresse,  
Calmant tes clameurs,  
Va toucher d'une caresse  
Les cheveux de ma maîtresse !

私は沈んで、死んでしまう！ おお私を遭難さ  
せる風よ、おまえの怒りを鎮め、私の恋人の  
髪を そつと撫でに行っておくれ！

O vent qui cause ce naufrage où je meurs, apaisant  
ta colère va effleurer doucement les cheveux de ma  
bien-aimée !

おお、私が死ぬこの嵐を引き起こす風よ、おま  
えの怒りを鎮めて私の愛する女性の髪にやさしく  
触れに行っておくれ！ 読人しらず（原歌未詳）

69. \*SONO RÉPONDIT ソノが答えた

Ah ! pour un vain rêve,  
Que l'aube en naissant enlève,  
Faut-il désormais,  
Après cette nuit trop brève,  
Sans honneur vivre à jamais ?

ああ！夜明けが来ればとりあげられる、むなしい夢のために、これからさき、あまりに短いこの夜のあと 面目を失ってずっと生きていかねばならないのですか。

Me reposer sur votre bras le temps d'un vain rêve d'une nuit de printemps ? faut-il pour cela braver l'opinion et tenir mon honneur ?

春の一夜のむなしい夢の時間にあなたの腕で休めと。そのために噂に立ち向かって、私の名誉を保たなければならないのですか。

春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなく立たむ名こそをしけれ

周防内侍（千載・雑上964・百67）

70. RÉPONSE DE TADAÏÉ タダイエの返し

Pourquoi donc si brève  
La nuit du printemps vainqueur ?  
Ah ! si c'est un rêve,  
Ce repos près de mon cœur,  
Que jamais il ne s'achève !

いったいなぜそんなに短いのですか 勝ち得た春の夜が。ああ！もしそれが夢ならば、私の胸のそばでのこの休息が、ずっと終わらないでいてほしい！

Pourquoi donc la considérer comme un vain rêve cette nuit de printemps, où, dans mon amour, je vous offre l'oreiller de mon bras ?

いったいなぜむなしい夢と考えるのですか、この春の夜を、私は愛があってあなたに私の手枕を差し出したこの夜を。

契りありて春の夜ふかき手枕をいかゞかひなき夢になすべき 大納言忠家（千載・雑上965）

71.\*

Puisqu'il le désire,  
Celui que chacun bénit,  
Cela doit suffire ;  
Mais au rossignol que dire  
Lorsqu'il cherchera son nid ?

皆が賛美する、その彼が望むのだから、それは結構なことにちがいない。けれども鶯には何と言おうか 彼の巣を探しにきたときに。

Il faut bien obéir aux ordres de l'empereur ; mais que dirai-je au rossignol qui ne trouvera plus son logis ?

帝の命にはよく従わなければなりません。けれどももう住みかを見つけれなくなる鶯に私は何と言えよいのでしょうか。

勅なればいともかしこし鶯の宿はと問はばいかゞ答へむ  
（拾遺・雑下531）

72. INCONNU

En désespéré  
J'attends la mort qui délivre :  
Car, s'il me faut vivre,  
Quelque jour je trahirai  
Le triste amour qui m'enivre.

絶望して 私は解放してくれる死を待っています。なぜなら、もし生きていなければならないのなら、いつの日か私は 夢中になった悲しい恋を表に出してしまうでしょうから。

Si ma vie fuit, eh bien je l'aime autant, car si elle dure encore je crains de ne plus pouvoir cacher mon amour.

もし私の命が過ぎ去るのなら、ええいっそのこと私はそれで結構です、もしこの命がまだ続けば私はこの恋をもう隠していられなくなるのが心配ですから。

玉の緒よ絶えなばたえねながらへばしのぶることのよはりもぞする

式子内親王（新古今・恋一1034・百89）

73. SÉMI-MAROU

La vie est là toute :  
L'on va, l'on vient, sur la route  
Où l'on débarqua ;  
Et tous passent sous la voûte  
De la porte d'Ossaka !

人生はすべてそこにある。行くも、来たるも、荷を下ろすその道で。そして誰もが オオサカの門のアーチを通り過ぎていく！

Voilà la vie : celui qui va, celui qui vient, ceux qui se connaissent et ceux qui s'ignorent, tous se séparent après avoir passé sous la porte d'Ossaka !

これが人生というもの。行く者、来る者、互いに知っている者や知らない者、誰もがオオサカの門の下を通り過ぎたあと別れていく！

これやこの行くも帰も別つゝ知るも知らぬもあふさかの関 蝉丸（後撰・雑一1089・百10）

74.\* KINSANÉ

ESPOIR DÉÇU

Je songe, en mon mal,                    裏切られた希望  
A l'altéré qui se penche  
Vers l'eau, frais cristal :  
L'eau d'entre ses doigts s'épanche ;  
Il n'a que mouillé sa manche !

苦しみのなかで、私は思う、清らかな水晶の、水面に 喉が渴いて身をかがめるひとのことを。水は彼の指のあいだから流れ出る。そして彼は袖を濡らししかなかったのだ！

Dans l'obsession de mon désespoir je voudrais me dire : Combien puisent de l'eau pour boire à la rivière qui voient fuir l'eau entre leurs doigts et n'ont fait que mouiller leur manche !

悲嘆のとりこになってしまったなかで、私は自分に言いたい。どれだけの人が川で水を飲もうとして汲むが、水が指の間から逃げていくのを見て、袖を濡らししきしないことか！

思ひあまり人に問はばや水無瀬川むすばぬ水に袖はぬるやと 大納言公実（千載・恋二704）

75. OUKOU

« Qu'il meure sur l'heure  
« Le traître ! » avions-nous juré....  
C'est pourquoi je pleure :  
Car, l'infidèle adoré,  
Le ciel va vouloir qu'il meure !

「裏切った者はすぐに死ぬように！」と 私たちは誓った.... だから私は泣いているのです。なぜなら、とても愛していた不実なあのひとは、死んでしまうように天が求めるでしょうから！ Nous avons fait serment de ne jamais nous oublier sans mourir. O toi qui m'oublies, comme je pleure ce serment qui met ta vie en danger.

私たちは死ぬほかは決して互いのことを忘れないと誓いを立てた。おお私を忘れてしまったあなた、私はこの誓いがあなたの命を危険におとしられるのを嘆いているのよ。

忘らるゝ身をば思はず誓ひてし人の命の惜しくもある哉 右近（拾遺・恋四870・百38）

76. SAMÉ-YORI

LE DEUXIÈME SAÏGOUN 二番目のサイグン

La grêle ricoche  
Du brassard au bouclier ;  
Et le cavalier  
Lance un trait vers le hallier  
Du champ de Na-Sou-No proche.

霰がはね返る 腕鎧から楯に。そして騎士は近くのナスノ平原の 藪に向けて矢を放つ。

Le grêle ricoche et résonne sur le brassard d'un cavalier qui tend son arc avec élégance et lance une flèche dans la plaine herbue de Nasouno.

霰が、ナスノの草の生い茂った平原で、優雅に弓を引き、矢を放つ騎士の腕鎧の上にはね返って、音をたてる。

もののふのやなみつくろふこてのうへに霰たばしるなすのしの原 源実朝（金槐和歌集・冬348）

77.\*

Le temps est bien vieux  
Où du brassard des aïeux  
Ricochait la grêle.  
C'est du fond d'un lit soyeux  
Que j'écoute son choc grêle.

先祖たちの腕鎧に 霰がはね返っていた あの  
時はずっと古い。 私がいまそのか細い音を聞いて  
いるのは 絹の床の奥である。

Qu'il est loin le temps où la grêle ricochait du  
brassard des cavaliers ! c'est du fond d'une retraite  
voluptueuse que je l'entends tomber aujourd'hui.

騎士たちの腕鎧に霰がはね返っていた時はなんと  
遠いことか！私が今日霰が落ちるのを聞いている  
のは、贅沢な隠居所の奥である。

こてのうへにふりし世しらで厚ぶすまかさねて  
夜半の霰をぞきく 松平定信（三草集88・冬88）

78. LE BONZE HENDJO

EN REGARDANT LES DANSEUSES DE LA  
COUR 宮廷の踊り子たちを見ながら

O vents que j'implore,  
Fermez les cieux enchantés,  
Pour que ces beautés,  
Que tant de grâce décore,  
Restent sur la terre encore !

おお風たちよお願いだ、見事な大空を閉じて  
おくれ、これほどの優美さに飾られた、美女  
たちが、まだ地上にとどまるように！

O vent du ciel, ferme la route des nuages pour que  
ces femmes délicieuses restent encore un instant sur  
terre !

おお空の風よ、雲の道を閉じて、これらの甘美  
な乙女たちがまだもう少し地上にとどまるように  
しておくれ！

天つかぜ雲の通ひ路ふきとぢよをとめの姿しば  
しとゞめむ 良岑宗貞（古今・雑上872・百12）

79. TSOURA-YOUKI

Saule, avec ton fil,  
Couds au cerisier fragile  
Les fleurs en péril.  
Trop tard ! l'écheveau s'effile  
Quand se découde le pistil !

柳よ、おまえの糸で、もろい桜の木に 壊れ  
そうな花々を縫いつけておくれ。遅かった！糸  
のかせがほぐれる めしべがほどけるときに！

Au printemps les filaments des saules devraient  
bien servir à coudre les fleurs de cerisiers ! hélas c'est  
quand les écheveaux se dévident que les fleurs mûres  
se décousent de l'arbre.

春に柳のすじは桜の花々を縫い付けるのによく  
役立つにちがいないだろう！悲しいこと、熟れた  
花々が木からほどけるのは、その糸のかせがつま  
ぐられるときなのだ。

青柳のいとよりかくる春しもぞみだれて花のほ  
ころびにける 紀貫之（古今・春上26）

80. INCONNU

Lentement brûlé,  
Fume l'arbre aromatique  
Haï du moustique.  
A ce feu dissimulé  
Ressemble mon cœur voilé.

ゆっくりと燃やされ、蚊に嫌がられる 香木  
が煙を出す。この隠された火に 私の覆われた  
心は似ている。

En été le feu du bois allumé dans le brasier, pour  
chasser les moustiques, se cache sous la fumée.  
Jusqu'à quand brûlerai-je ainsi en secret ?

夏に蚊を追い払うため、炎のなかでともされた  
木の火は、煙の下に隠れる。いつまでこんなふう  
に私は密かに焦がれているのだろうか。

夏なれば宿にふすぶる蚊遣火のいつまでわが身  
したもえをせむ 読人しらず（古今・恋一500）

81. INCONNU

S'il pouvait m'entendre  
Le vent qui souffle là-bas,  
J'irais sur ses pas  
Lui dire : Ne brise pas  
Cet arbre au feuillage tendre.

もしあそこで吹いている風に 聞いてもらうことができるなら、私はその通り道へ行って 風に言うのに。かよわい葉のこの木は 壊さないでと。

Si l'on pouvait se faire écouter du vent qui souffle,  
je lui demanderais d'épargner cet arbre.

もし吹く風に聞かせられるなら、この木は助けてやると私はお願いするだろう。

吹風にあつらへつくるものならばこの一本は避きよと言はまし 読人しらず (古今・春下99)

82. MITI-MASSA

Mon espoir suprême  
Est de pouvoir, un seul jour,  
Vous dire à vous-même :  
Je veux arracher l'amour  
Du triste cœur qui vous aime !

最後の望み それは、ただいつか、あなた、あなた自身にこう言うことです。あなたを愛する悲しい心から 愛を剥ぎ取りたいのだと！

Ah ! que ne puis-je vous dire à vous-même, une fois au moins, que je ne veux plus penser à vous !

ああ！あなた、あなた自身に言えればいいのに、せめて一度でも、私はもうあなたを思っていたくないと！

いまはたゞ思ひたえなんとばかりを人づてならでいふよしもがな

左京太夫道雅 (後拾遺・恋三750・百63)

83. KINTENÉ

Le vent fait neiger  
Sur la terre, blanche tombe,  
Les fleurs du verger ;  
Et je me prends à songer  
Qu'aussi je décline et tombe.

風が雪を降らせる 白い墓場、地上の、果実の花々に。そして私は不意に思い始める 私もまた衰えて落ちてしまうのだと。

Ce n'est pas seulement les fleurs du jardin que l'orage fait neiger : celui décline et tombe aussi, c'est moi.

嵐が雪を降らせたのは庭の花々にだけではない。同じく衰えて落ちてしまうもの、それは私だ。

花さそふ嵐の庭の雪ならでふり行くものは我身なりける 藤原公経 (新勅撰・雑一・百96)

84. TADA-KANÉ

Vent âpre et tranchant,  
A ta colère exposée  
La branche est brisée ;  
Tu lui prends encor, méchant,  
La pitié de la rosée !

激しく厳しい風よ、おまえのむきだしの怒りで 枝が折れてしまった。おまえはまだ、意地悪く、露への憐みまで取り上げようとする！

Sans relâche le hargneux vent d'automne harcèle cette nappe de lierre et il ne lui laisse même pas la pitié de la rosée.

たえまなく秋の険しい風がこの木蔭の一面をしつこく攻撃して、そこに露への憐みすら残さない。

真葛原露のなさけもとどまらずうらみし中は秋風ぞ吹 従三位忠兼 (新後拾遺・恋五1245)

85. TADAMINÉ

De perdre la vie  
J'aurais été moins navré,  
Que d'être tiré,  
Si tôt, du rêve adoré  
Où mon âme était ravie !

命を失うことのほうが 私には辛くないだろう、  
こんなに早く、ひき離されるよりは、心が  
うっとりさせられていた すばらしい夢から！

Ce qu'il y a de plus regrettable, plus regrettable que  
la vie ; c'est d'être interrompu dans un rêve cher.

もっと惜しいこと、命よりもっと惜しいこと、  
それは大事な夢の邪魔をされることだ。

いのちにもまさりておしくある物は見はてぬ夢  
の覚むるなりけり 壬生忠岑（古今・恋二609）

86. MASSA-SOUNI

La glace se brise :  
L'onde revit sous la brise  
Frôlant les étangs ;  
L'écume de l'eau s'irise,  
Première fleur du printemps !

氷が割れる。池をかすめるそよ風の下で 波  
がよみがえる。水の泡が虹色に輝く、春一番  
の花！

Sous la glace que fond le souffle tiède de la vallée,  
la blanche écume de l'eau qui se réveille est la  
première fleur du printemps.

谷のなまあたか風が解かす氷の下で、吹き  
出す水の白い泡は春の最初の花だ。

谷風にとくる氷のひまごとに打いづる波や春の  
はつ花 源当純（古今・春上12）

87. HITO-MARO

Ce matin je veux,  
Sans que l'or du peigne y passe,  
Laisser mes cheveux :  
J'aurais trop peur qu'il efface  
Des baisers la chère trace !

今朝は 櫛の黄金は通さずに、髪をこのまま  
おいておきたい。幾度のくちづけのいとしい跡  
が 消えてしまうのではないかと余りに心配だか  
ら！

Je ne peignerai pas mes cheveux ce matin, pour ne  
pas en effacer les caresses du bien-aimé.

今朝は髪をとかさないでおきましょう、愛する  
ひとの愛撫を消してしまわないように。

朝寝髪我はげづらじうつくしき人の手枕触れて  
し物を 柿本人麿（拾遺・恋四849）

88. TOMONORI

*Envoi d'une branche de prunier en fleur*

花咲いた梅の一枝の贈り物

A toi je l'adresse  
Cette branche aux tendres fleurs :  
Seul qui sait l'ivresse  
Des parfums et des couleurs  
En mérite la caresse.

あなたに送ります この淡い花々の一枝を。  
この香りと色とに 酔いしれることのできる者だ  
けが、この愛を受けるにふさわしいのです。

A qui enverrai-je ces fleurs de prunier, si ce n'est à  
vous ? celui qui sait apprécier couleur et parfum mérite  
seul de les recevoir.

誰にこれらの梅の花々を送るだろうか、あなた  
にではなくて。色と香りを楽しむことのできるひ  
とだけがこれらを受け取るにふさわしい。

きみならで誰にか見せむ梅花色をも香をもしる  
人ぞしる 紀友則（古今・春上38）

構成上、本文と一緒に掲載できなかった詞書を次に記す。

15.\*

*Au manège des archers, le poète, passant à cheval, aperçoit une inconnue à travers les stores d'un char traîné par des bœufs.*

弓兵たちの馬場に、詩人が、馬で通りがかり、牛車の簾越しに見知らぬ女性を見た。

69.\*

*Un soir de printemps les filles d'honneur étaient réunies chez la princesse Nizio et l'on devisait gaiement. La belle Sono, étendue paresseusement, demanda un coussin pour reposer sa tête. Le seigneur Tadaïé, qui passait sur la galerie extérieure, l'entendit à travers le store et lui offrit l'appui de son bras.*

ある春の夜、高貴な娘たちがニジョウ姫のところに集まり、にぎやかにお喋りをしていた。美しいソノが、けだるそうになだれかかり、頭を休める枕を求めた。タダイエ公が、外の回廊を通りがかり、簾越しにそれを聞いて、彼女に自分の腕の支えを差し出した。

71.\*

*Un jour l'empereur avait admiré, en se promenant, un prunier aux fleurs roses et il voulait le faire transporter dans son jardin ; il envoya un messenger pour déraciner l'arbre. La maîtresse de l'enclos où se trouvait le prunier répondit :*

ある日、帝が散歩をしているとき、ばら色の梅の木をたいそう褒めて、自分の庭に移したかった。帝はその木を掘り返させるため使者を送った。梅の木があった囲い地の女主人が答えた。

74.\*

*Faisant partie des cent outas offerts au mikado Hori-Kava.*

ホリカヴァ帝に捧げる百のウタに参加して。

77.\*

*Un daïmio 250 ans plus tard, dans une période de paix, en songeant au poème précédent.*

250年後、平和な時代に、ある大名が先の詩を思っつて。

\*

ジュディットによる韻文訳を和訳するにあたり、地名や人の名前をもとの漢字表記ではなく、カタカナで記すことにした。これは、『蜻蛉集』のフランス人読者が、ほとんど馴染みのない日本語の音に、そのままふれることのできる唯一の箇所がこれらの固有名詞であったことによる。さまざまな意味をまとう漢字表記をいったん忘れ、できるだけ当時の読者の感覚に近づいて、音声そのものを意識できるような形をとった。

なお、『蜻蛉集』の巻頭には、序文代わりとして、『古今和歌集』「仮名序」の抄訳が置かれているが、今回は省略した。